

小島信夫を めぐる 文学の現在

大橋健三郎
河野多恵子
後藤明生
佐伯彰一
篠田一士
森敦
吉行淳之介

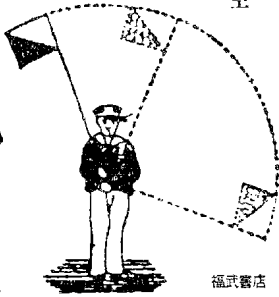
小島信夫を

編集—大橋健二郎—河野多恵子—後藤明生

めぐる

佐伯彰一—篠田一士—森敦—古行淳之介

又学の現在



福武書店

小島信夫をめぐる文学の現在

1985 年 7 月 10 日 第 1 刷印刷

1985 年 7 月 20 日 第 1 刷発行

編 集 大橋健三郎
河野多恵子
後 藤 明 生
佐 伯 彰 一
篠 田 一 士
森 敦
吉行淳之介

発行者 福 武 哲 彦

発行所 株式会社 福武書店 〒102 東京都千代田区九段南 2-3-28

電話 東京 (03)230-2131 振替 東京 6-105097

印刷 精 興 社

製本 小泉製本

定価 3600 円

ISBN 4-8288-2156-2 C 0095

NDC 918 216 420p

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

© 1985 Kenzaburo Oohashi

小島信夫をめぐる文学の現在

編集委員

大橋健三郎

河野多恵子

後藤明生

佐伯彰一

篠田一士

森 敦

吉行淳之介

小島信夫をめぐる文学の現在
目次

I

その風貌

吉行淳之介 11

まず思うこと

河野多恵子 18

小島信夫氏の作品と私

江藤淳 23

濃尾の文学語

川村二郎 31

最近の小島さんの三つの文章

後藤明生 36

“弟子の眼”の遍歴

磯田光一 46

はじめてあった頃

篠田一士 53

小島信夫の優しさ

野島秀勝 57

「自分」を書け

三浦清宏 66

小島信夫の文学講義

竜野連 84

II

ある断念と信念―『別れる理由』をめぐって

大橋健三郎 105

『別れる理由』叙述の声―自由間接話法的文体

志村正雄 117

小島信夫のカッコのわるさ

平岡篤頼 128

最後の性―『抱擁家族』における神の問題

千石英世 139

『女流』見えかくれする女たち

近藤耕人 158

三十年ぶりの『小銃』

進藤純孝 169

人間関係の網目による抽象小説

奥野健男 180

―『島』を中心にして

高砂・蜻蛉他―短篇集『月光』について

坂内正 187

馬になる理由

八木敏雄 196

戯曲「どちらでも」について

清水邦夫 208

作者はどこにいるか

三浦雅士 216

あるいは曖昧さについて

III

小島さんとのこと

森敦 225

べつの話

大庭みな子 232

小島先生にあったころ

田中小実昌 238

「仕方のないことだ」―小島信夫のこと

浅川淳 245

歲月の重み―小島信夫のこと

宇佐見英治 252

小島の手紙

岡本謙次郎 262

ピカビアの〈怪物〉をめぐる

海上雅臣 270

ナボコフの記憶

新谷敬三郎 281

作家遍歴

石一郎 290

『風』の話

山田智彦 295

IV

小島さんの円熟

佐伯彰 307

―コンフォーミストのデフォーメーション

「失敗の見事さ」について

加島祥造 316

新しい世界が開ける

宮本陽吉 326

同時代の作家

邦高忠二 334

小島さんとアメリカ小説

大津栄一郎 340

小島先生とアメリカ文学

井上謙治 350

コジマ・コロニー―明大工学部英語科のこと

浜本武雄 360

V

小説とは何か―私の「最終講義」

小島信夫 371

小島信夫 小説作品目録一覧

平光善久 399

あとがき

417

その風貌

吉行淳之介

小島信夫と知り合ったのは、昭和二十八年初春だから、三十年を越すつき合いになる。「文学界」編集部が当時の新人を集めて「一二会」というのをつくったのは、いろいろの人が書いているからくわしくは書かないが、その会ではじめて会った。

その頃、私は結核を発病したばかりで、小島信夫が千葉県佐原の山野病院を紹介してくれた。その病院の離れみたいところに、二十八年五月から二カ月ほどいた。さらに、二十八年末から一年間近く清瀬病院に入院していたので、知り合った直後から、その交友には二度のブランクができた。それなのに、昭和二十八、九の二年間にかぎって考えても、たくさん思い出があるのだから、濃密な季節だったといえるだろう。

小島信夫のエッセイに「市ヶ谷駅付近」(新潮 昭和三十四年四月号)というのがある。気に入った作品だ、と自分で言っている。市ヶ谷にあった私の家に、安岡章太郎に誘われてはじめて訪れたときのことにはじまり、当時の安岡や庄野潤三の風貌が活写されている。もちろん、私のことも。そして、文章の奥に一貫しているのは、「意地悪」な眼である。ここで括弧を付けたのは、正しい観察はしばしば意地悪になる、という意味である。

この二十枚ほどのエッセイの後半は、「芥川賞」にこだわる私たちへの批評である。いや、安岡はすでに昭和二十八年夏に受賞しており、私は同年十二月に清瀬に行ってしまったから、その年の秋のことを書いているわけだ。せっかくだから、末尾のところを再録してみよう。

『私は吉行宅から庄野をつれ出してお濠端を散歩した。彼はその夜また大阪へ帰ることになっていた。吉行のアタマの中も庄野のアタマの中も、芥川賞のことでいっぱいだった。安岡がなったとすれば、自分達もなれぬことはない。吉行が、

「これはいいことだ、順番が早くまわってくるのだから」

とさっき書いていたことを思い出した。賞のことでは二人は私の先輩である。私はその先輩の心の中は、ほんとは、よく分ってもいなかった。

「いい天気だな」

庄野は立秋になったばかりの空を見あげて誰にいうともなくいった。彼は自分の士気を鼓舞しようと思ったらしい。

「しかし、あまりよすぎるよ」

私は何げなくいった。そしてしまったと思った。

「よすぎる」

庄野は、案のじょうけたたましく笑いだした。そして彼のブルーな状態はいっききに吹きとぶかと思えた。

「きみはオカシナやつやな、ほんまにオカシナやつやな」

庄野はくりかえした。そして私自身も、これは少しおかしいかもしれないと思った。しかし、青天を見て、曇天のことを考える性癖は、いかんとも、私には抜けがたいと瞬間私は思った。私はその性

癖が我ながら不快であった。しかも何かそこには人間の当然のものがあるとも思えて、心がいたんできた。しきりといたんできた。』

それでは、小島信夫は芥川賞を意識しなかったか。私たちとは違う屈折の形で、「芥川賞なんか貰っては迷惑」という気分を含んで、その賞を意識していたような気がする。そのころの小島信夫の作品に「犬」というのがあって、芥川賞をほしがる新人の群像をアイロニカルに書いていて、私などかなりオーバーな役を振り当てられている。そして、作者はずっと観察者の立場にいる。しかし、アイロニイは人も刺すが自分も刺すというのは自明の理で、そうでなくては書く意味がない。「犬」を書いたことは、小島信夫が芥川賞に彼独特のかかわり合い方をしていた、という証拠でもあろう。因みに、いま新人賞は数え切れないくらいたくさんあるが、当時は芥川賞だけで「文藝界新人賞」もまだ出来ていなかった。

昭和六十年には、小島信夫は古稀、私は前の年に還暦をむかえている。ということとは、九歳の違いがあるわけで、昭和二十八年には私は二十九歳、小島信夫三十八歳である。

小島信夫としては、年長者の自分が、若い連中と同級生のように振舞うという立場に身を置いたことにたいして、にがにがしい気分がいつもついてまわっていたのだろう。また、同人雑誌のキャリアも長く、その仲間たちの眼も意識しないわけにはいかなかっただろう。商業ジャーナリズムのつくった新人のための会に参加している自分にたいして向けられる、旧友たちの咎める眼も当然意識に上ったろう。それに、彼の資質自体が、物事とストレートにかかわり合ったままでいるものではない。

以前、小島信夫の全集の月報を書いたことがある。そこで私は、「彼は文学の話を着にして酒を飲むくらいにブンガク人間である」という意味のことを書いた。そのあと、ある会で彼に会ったとき、まるで不平があるように上唇が尖るあの独特の微笑で、

「あの月報の文章で、キマリだね」

と、私に言った。

つまり、自分が「ブンガク人間」と規定されることを喜ぶような口ぶりだった。しかし、あるいは、月報という面倒な仕事にたいするねぎらいの言葉だったのかもしれない。

じつは、芥川賞のことを書くつもりはなかった。「市ヶ谷駅付近」を引用したために、そうってしまったのだが、ことのついでに彼の受賞の日のことを書いておこう。

昭和三十年一月中旬のある夜、小島信夫の受賞を知ったので、とりあえず彼の家へ行ってみた。当時、彼は中野に住んでおり、市ヶ谷からはタクシーで一走りだった。その家はいつもと同じ様子で、二階に通されたが、小島信夫は当惑したような無然としたような顔のまま坐っていた。小一時間、なんとなくそうしていたが、誰も訪れてこず、電話もかかってこず、私も浮かぬ気分になって帰ることにした。もっとも、当時の受賞の夜は、だいたいこんなものだった。ただ、当選作の担当編集者からの電話もなかったのは、「芥川賞くらいで祝いの電話をするのは、はしたない」という見識によるものだろうか。そういえば、私は清瀬病院入院中に受賞したが、やはりその夜は電話一つかかってこなかった。今とは大きな違いである。

ところで、小島信夫との三十数年に互るつき合いで感じるのは、彼の風貌がすこしも変わらないことである。もちろん、互いに齢をとって行っているから感じ方も鈍くなるわけだが、それにしても変らない。

数カ月前、ある新聞で十数年ぶりに遠藤周作とくだけた対談をした。そのとき、昭和三十年ころのエピソードが話題になって、その中に小島信夫が登場した。その話に出てくる彼が今とまったく変わらず、面目躍如としていたので、私はしばらく笑いが止まらなくなった。その部分を再録したい。